

貧血 Anemia

血液の成分のうち赤血球は、主に肺から取り入れた酸素を体中に供給し、二酸化炭素を肺へ戻し体外に排せつするという生命を維持するうえで最も大きな機能のうちのひとつを担っています。貧血とは簡単に言えば、この赤血球の数が少なくなることです。これは出血などにより少なくなる場合と、古くなったり壊された赤血球よりも新しく作られる赤血球の数が少ない場合におこります。また、再生可能な貧血と再生することが難しい貧血(非再生性貧血)に分けることができます。貧血とは病気の名前ではありません。症状の一つと考えていただいたほうが理解しやすいでしょう。

原因

貧血の原因には多くのものがありますので、すべてをここで挙げることはできませんが、代表的なものだけをいくつか記載しておきます。

まずは、ある種のビタミン(B6、B12、Cなど)や鉄など赤血球を造るのに必要なものの不足、肝臓や腎臓、脾臓などの病気、寄生虫やウイルス、細菌感染、アレルギーなどの免疫系異常、腫瘍、中毒、骨髄の異常、発熱などがその主なものです。これらとは多少異なりますが、外傷などによる出血も貧血の大きな原因です。

また、様々な病気が長期化することによっても貧血がおこることがあります。

症状

貧血自体が一つの症状とも言えますが、その他に、食欲不振や、疲れやすい、倒れる、歩けないなど貧血の程度により様々な症状が現われます。また、目の粘膜や舌が白っぽくなることも一般の方が気づきやすい貧血の症状のうちの一つです。

診断法

貧血であるかどうかは簡単な血液検査により判定することができますが、どのような種類の貧血であるかを調べなければなりません。そのため、MCV(平均赤血球容積)、MCH(平均赤血球血色素量)、MCHC(平均赤血球血色素濃度)、網状赤血球数などを算定します。また、その他種々の血液検査、時には脾臓の状態などを確かめるためにレントゲンや超音波検査が必要になります。

治療法

治療法は貧血の種類や原因により様々です。まずは、原因を除去することが最優先です。寄生虫であれば寄生虫を駆除する、中毒であればその原因を治療するなどです。ただ、一般

的にはそれらの原因を突き止めるまで待ってられないこともあります。その場合は、輸血、鉄剤や増血剤、ビタミン剤の投与、副腎皮質ホルモン剤や止血剤などの対症療法を行います。

自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありません。処方された薬剤はきちんと与えて下さい。食餌ができるのであれば十分に栄養価の高いもの、また赤血球を造りだすことに必要な成分を多く含んでいるものを与えましょう。そのためには、高栄養の処方食を主治医の先生に相談して出してもらおうといいでしょう。

予防法

赤血球を造りだす物質不足による貧血は、きちんとしたメーカーのペットフードやサプリメントを与えることで十分予防できるでしょう。また、いくつかの貧血を起こす可能性のあるウイルス性疾患はワクチンで予防できます。病気や外傷を早急に治療して慢性化させないことも貧血を防止する一つの有効な方法です。

メモ

一般的に犬ではヘマトクリット値が37%、猫では27%以下になると貧血と判断します。次のステップとしてより詳しく診断や治療プランを考えるために網状赤血球数を求めます。これにより再生性の貧血なのか非再生性の貧血なのかを見分けます。重度の貧血の場合、輸血が必要になりますが、現在のところ日本では人間の赤十字社のように動物の輸血用血液をストックしている機関はありません。(以前民間企業がありましたますがすぐに倒産してしまいました)そのため状況によっては輸血が困難なこと、輸血費用はかなり高額になることなどから治療を断念せざるを得ない状況もあります。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..